



TITLE:

<巻頭言>地域の人々との協働による実践型地域研究のさらなる充実をめざして

AUTHOR(S):

水野, 広祐

CITATION:

水野, 広祐. <巻頭言>地域の人々との協働による実践型地域研究のさらなる充実をめざして. 実践型地域研究中間報告書: ざいちのち 2011

ISSUE DATE:

2011-03

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/147994>

RIGHT:

巻頭言：地域の人々との協働による実践型地域研究のさらなる充実をめざして

東南アジア研究所所長・研究プロジェクト代表 水野 広祐

東南アジア研究所は、従来、東南アジアを中心とする海外地域を主なフィールドとして地域研究を行ってきました。これまでの海外における研究で練り上げてきました地域研究の方法論と、その過程で蓄積されてきた知見を日本の地域社会に活かそうという目標を立てました。そして、地域の人々とともにある地域研究の理念をきっかけ、滋賀サイト型機動研究の一つの柱として生存基盤科学研究ユニットに参加しました。滋賀県立大学、京都学園大学、NPO プロジェクト保津川、NPO 平和環境もやいネット、NPO 市民環境研究所、火野山ひろば、亀岡市、守山市などの諸団体と地元の皆さんと一緒に地域の問題を考え行動する「在地と都市がつくる循環型社会再生のための実践型地域研究」を 2008 年 4 月に立ち上げ実施し、4 年間のプロジェクト期間のちょうど折り返し点を迎えています。具体的な実践型地域研究の場として滋賀県の朽木、守山、京都府の亀岡にフィールドステーション（FS）を設置し、対象を外から観察するだけではなく、内側から問題を把握し解決する方を地域の方々と実践に参加することで一緒に考えてきました。本報告書で報告されているように、守山 FS では「琵琶湖の漁業と食文化の復興」、朽木 FS では「水と火のエネルギーを活用した、源流域での生業基盤づくり」、亀岡 FS では「筏をシンボルとした人・山・川・町（都市）のつながりの再構築」などが主要テーマとなり、FS 担当の研究員を中心に、地元住民・NPO・地方自治体との協働による実践的な研究活動に取り組んでいきました。プロジェクトでは 2008 年 10 月以来、毎月ニューズレターを発行し、関係各位にお届けしてきましたが、節目の時を迎えるにあたり、鈴木玲治助教が中心となり、中間報告書をまとめました。関係各位の皆様にはもう一度私たちの活動を振りかえっていただく機会として、また地域研究に興味をいだかれる方々には私たちの実践型地域研究の活動をお伝えする機会にしたいと願っています。

生存基盤科学研究ユニットには、東南アジア研究所の他に、京都大学の 4 つの研究所（化学研究所・エネルギー理工学研究所・生存圏研究所・防災研究所）が参加し、既成科学の学問的な枠にとらわれない自由な発想に基づく、人類の生存のための科学を築く研究活動を展開しております。生存基盤ユニットへの参加の機会が与えられたことにより、地域研究の新しい展開を試みることができました。また、守山市とは生存基盤科学研究ユニットとして MOU（学術協定）を結ぶことができ、山田守山市市長ならびに職員の方々には格別のご配慮を賜りました。本プロジェクトが円滑に目的を達成するため、この 2 年間の地元の皆様、関係団体の皆様、ユニット関係者の皆様のご協力に感謝致しますとともに、後半の 2 年間の活動にむけて、より一層のご協力とご理解、ご参加を今後ともよろしくお願い申し上げます。巻頭言にかえさせていただきます。